

石器生産と消費形態からみた北部九州弥生社会の展開過程

森, 貴教

<https://hdl.handle.net/2324/1654593>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文題目

石器生産と消費形態からみた北部九州弥生社会の展開過程

氏名 森 貴教

論文内容の要旨

石器生産と消費形態からみた北部九州弥生社会の展開過程

本論文は、弥生時代の北部九州地域における石器生産・消費の変遷を検討し、当時の社会の展開過程を明らかにするものである。具体的な目的は大きく2点ある。1点目は、弥生時代の北部九州における石器生産・消費形態について、石製農工具を対象として通時的かつ実証的に明らかにすることである。2点目はこうした石器生産・消費形態の背景や特質について、朝鮮半島南部の青銅器時代、鉄器化との比較を通じて明らかにすることである。

上記2点の目的を達成するために、第1章ではこれまでの研究史をまとめ、さらに本論文で使用する理論と方法の提示、用語の定義をおこなっている。そして具体的に以下4点の問題点を抽出し、それらの解決を図ることにした。

- 問題点1 通時的な検討の欠如
- 問題点2 朝鮮半島南部との比較が未検討（第2章）
- 問題点3 器種を横断した検討の欠如（第3章）
- 問題点4 石器生産・消費形態と鉄器化の関連性が不明（第4章）

次の第2章では、弥生時代に先行する朝鮮半島南部の青銅器時代の石器生産・消費形態について、柱状片刃石斧を対象として分析した。その結果、朝鮮半島南部の嶺南地域では中西部地域からの松菊里文化の伝播を契機として、青銅器時代後期に石器生産・消費システムが重点生産型（原産地直下型）へと大きく転換したことを指摘した。朝鮮半島南部の場合、多くの石器器種が青銅器時代前期から後期へと継承されている点で、列島の弥生時代開始期とは異なるが、北部九州と比較して石器生産・消費システムの変化が短期間であった。この要因として、有節柄式石剣や副葬品（玉類）など埋葬儀礼に関わる側面で集団間の関係（相互作用網）が取り結ばれていたことが影響したと考えた。また、磨製石剣や磨製石鏃などリーダー間でやりとりされる器物の素材と、片刃石斧という日常的に用いられる木材加工斧の素材が高霊・義鳳山周辺のホルンフェルスで共通している。青銅器時代前期から後期にかけての石器生産・消費システムにみられる分業化は、半島南部においては社会内部の階層化の進展と連動しながら発現したといえ、この点は弥生時代と大きく異なる点であることを指摘した。

第3章では弥生時代の北部九州における石器の生産・消費形態について、木工具である両刃石斧

および片刃石斧、収穫具である石庖丁を対象として検討した。その結果、石器の器種により生産・消費のシステムが異なっていたことが明らかとなった。弥生前期末を画期として共同体間分業が進展し、特定石材製の石器製品が広域的に流通するようになった。石器器種に応じて石材原産地が分散して存在しており、固有の道具体系を有していたという点が、北部九州の弥生時代の特質であることを示した。

第4章では砥石および木製斧柄の分析に基づいて弥生時代後半期における農工具の材質変化（鉄器化）の過程について検討した。その結果、弥生中期後半に工具類の鉄器化が進行し、弥生前期から中期前半にかけて形成された石器石材と器種の固定、石器製品の流通関係が断ち切られたことが明らかになった。弥生中期後半における鍛冶技術の導入を画期として、鉄器の消費を前提とする生産・消費システムへと変化した。

鉄という共通の素材を用いて、伐採斧・加工斧・収穫具など異なるカテゴリーに含まれる器物が生産されはじめたことは、石器の価値体系を根本から動揺させ、弥生後期以降、弥生前期から中期にかけて発達した石器の生産・消費システム（分業化・共同性志向）は、鉄器の出現により断絶したと考えられる。鉄器の生産において最も重要なのは朝鮮半島南部からの鉄素材の入手である。安定的かつ恒常的に鉄素材を入手するために長距離交易ネットワークの拡大・整備が図られたといえる。

こうした分析結果を基に、第5章では石器生産・消費形態の時期的な変遷にみられた画期の意義と、認められた現象の発現のメカニズムや背景について、異なる物質文化などとの対比から考察し、石器生産・消費システムの変遷についてモデル化した。

弥生時代は朝鮮半島南部からの影響のみならず、弥生時代の集団が自律的に、共同性を志向しつつ展開した時代であった。資源の偏在性や限界を克服するために共同性を最大限に高め、集落間のネットワークを発達させたことこそが、北部九州弥生社会の特質といえる。弥生中期後半以降、漢四郡の一つである楽浪郡の成立（前108年）を大きな画期として、長距離交易がはじまり、鍛冶技術が導入された。弥生後期以降、次第に中期後半以前の集落間ネットワークと生産・消費の単位が縮小し、石器生産・消費システムが質的に変化した。鍛冶技術の導入により道具の価値体系が動揺し、分業化・共同性志向の集団間関係を根本から変質させたのである。また、鉄素材などの入手を安定的におこなうため集団内の代表的機能が促進された結果、首長層が形成された可能性を指摘した。